

経済統計 練習問題

第10回 労働に関する統計(2)

2015年10月28日

問1 以下の文章を完成させよ。

年齢階級別失業率のデータを見ると、若年層の失業率は高い。しかし、若年層をとりまく就労環境には、失業率にあらわれない部分があり、さらに厳しいものであるといえよう。

1つはフリーターの問題である。労働力調査では _____ に分類される彼らの中には、正職員になりたい者も多くいる。このような状態を _____ という。

もう1つはニートの問題である。ニートは労働力調査では _____ に分類される。

この2つのグループを含めると、現在の就業状態に満足していない若年層は、実際の失業者以上に多いと考えられる。

賃金をとらえる統計として、_____ がある。この統計では、事業所に勤める労働者に支給された給与総額から、1人あたりの平均賃金が求められている。この公表されている結果の1つに賃金指数があるが、実質賃金指数とは _____ の変動の影響を考慮に入れたものである。

年齢、学歴、職種の違いなどを考慮に入れた賃金のデータは、_____ によって得ることができる。この調査結果において、学校を出てからただちに就職し、同一企業にずっと勤務している者のことを _____ という。

問2 次の表は、総務省「労働力調査」(昭和50年,平成12年,平成22年)の女性の年齢階級別労働力人口比率(労働力率)である。この表に関して、下の①~⑤のうちから、適切でない説明を一つ選びなさい。

年齢階級別労働力率(女性)の推移

単位: %

年齢階級	1975年	2000年	2010年
15~19歳	21.7	16.6	15.9
20~24	66.2	72.7	69.4
25~29	42.6	69.9	77.1
30~34	43.9	57.1	67.8
35~39	54.0	61.4	66.2
40~44	59.9	69.3	71.6
45~49	61.5	71.8	75.8
50~54	57.8	68.2	72.8
55~59	48.8	58.7	63.3
60~64	38.0	39.5	45.7
65歳以上	15.3	14.4	13.3

資料: 総務省「労働力調査」(昭和50年,平成12年,平成22年)

- ① 女性の年齢と労働力率の関係は、横軸に年齢、縦軸に労働力率をとって折れ線グラフを作ったときの形状から、M字型と呼ばれる。
 - ② 各調査年とも20歳代前半に比べて、20歳代後半、30歳代前半、30歳代後半の年齢階級で労働力率が低下している年齢階級があるが、その3つのうちで最も低い労働力率を示す年齢階級の年齢は、調査年を追うごとに高くなっている。
 - ③ 各調査年とも20歳代前半に比べて、20歳代後半、30歳代前半、30歳代後半の年齢階級で労働力率が低下している年齢階級があるが、その主な理由は、婚姻、出産に伴う離職等である。
 - ④ 25歳～64歳では、いずれの年齢階級でも、調査年を追うごとに労働力率は高くなっている。
 - ⑤ 15歳～19歳、20歳～24歳では、大学進学率の上昇を反映して、労働力率は調査年を追うごとに低下している。
- (統計検定専門統計調査士 2012)

問3 次の表は、1995年から2010年までの5年おきの年齢階級別に入職者数と離職者数、両者の差(常用労働者5人以上の事業所)を示している。この表について、以下の[1]と[2]の間に答えなさい。

年齢階級別入職者数及び離職者数(1995～2010年、常用労働者5人以上の事業所)

(単位: 1000人)

年次	総数	19歳以下	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～44歳	45～54歳	55～59歳	60～64歳	65歳以上
入職者数										
1995	4522	569	1421	569	395	693	566	154	120	37
2000	5523	705	1468	853	562	805	687	213	176	53
2005	7482	909	1782	1143	854	1219	816	369	317	74
2010	6309	718	1384	774	696	1163	792	333	358	91
離職者数										
1995	4873	230	1104	804	427	738	652	291	427	200
2000	5959	406	1159	1035	631	837	813	359	531	188
2005	7555	542	1402	1188	868	1227	932	514	603	280
2010	6425	351	1005	868	749	1153	788	439	711	361
入職者数 - 離職者数										
1995	-351	339	317	-235	-32	-45	-86	-137	-307	-163
2000	-436	299	309	-182	-69	-32	-126	-146	-355	-135
2005	-73	367	380	-45	-14	-8	-116	-145	-286	-206
2010	-116	367	379	-94	-53	10	4	-106	-353	-270

資料：厚生労働省「雇用動向調査報告」

[1] 1995年から2010年までの5年おきの入職者数と離職者数について適切な説明を、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい

- ① 2000年から2005年にかけて、一部の年齢階級で入職者数が減少した。
- ② 1995年から2000年にかけて、20歳代後半の入職者数の増加よりも30歳代前半の入職者数の増加の方が大きかった。
- ③ 2000年から2005年にかけて、すべての年齢階級で離職者数が増加した。
- ④ 20歳代の離職者数は増加し続けていた。
- ⑤ 30～34歳の離職者数は、55～59歳の離職者数よりも少なかった。

[2] 1995年から2010年までの5年おきの入職者数と離職者数との差に関連して適切な説明を、次の①～⑤のうちから、一つ選びなさい。なお、たとえば、-100から-150に変化することを、「-100から-150に減少する」(-150 - (-100) = -50)と表現する。

- ① 総数で、入職者数と離職者数の差が減少し続けた。
- ② 2010年において、すべての年齢階級で、入職者数の方が離職者数より少なかった。
- ③ 35～44歳で、入職者数と離職者数の差が増加し続けた。
- ④ 1995年から2010年のどの年次も、60～64歳で入職者数の増加が離職者数の増加よりも少なかった。
- ⑤ 1995年から2010年のどの年次も、65歳以上で入職者数の増加が離職者数の増加よりも少なかった。

(統計検定 統計調査士 2013)